

かかわり合いから学ぶ情報モラル教育

－ チェーンメールの事例を通して －

石川県金沢市立小坂小学校 教諭 小林 祐紀
y_k0803@me.com

キーワード：小学校、高学年、情報モラル、チェーンメール、かかわり合い

1. はじめに

近年、情報機器の発達により、情報モラル教育の必要性がさまざまな場で議論されている。しかし、情報モラル教育に関しては、その指導方法が確立しておらず、さらに指導内容（教材）も年々変化するものだと考えられる。

私の学級（5年2組 児童数36名：昨年度）においては、児童全員がパソコンや携帯電話などでメールを行った経験があり、日常的に家族とメールをやりとりしたり、チャットや掲示板を利用したりしている児童は5名確認できた。

そこで、中学校への進学をひかえた高学年の時期に、メールの使い方やトラブルへの対処方法を指導しようと考えた。しかし、いわゆる「べからず」指導では、児童の心には響かないと考え、指導する際には学級目標でもあった「他者とかかわり合いながら学ぶ」ことを強く意識するようにした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、かかわり合いながら学ぶことを意識した情報モラル単元「メールの使い方」を設計し、その有用性を明らかにすることである。

3. 単元の開発方針

3. 1 本単元を3時間で構成する

従来の情報モラル教育は、1時間だけで構成される場合が多い。1時間の授業では、体験にもつづいた十分な議論や体験活動自体にも十分な時間を確保することできない。しかし、あまりに長期に及ぶ場合、授業時間の確保や教育課程（カリキュラム）への位置づけが難しく、他の学習内容への影響も大きくなると考えられる。そこで本単元を3時間で構成することにした。

3. 2 本単元を「疑似体験-座学-本物体験」で構成する

3時間で構成する本単元を次のような学習内容とした。1時間目：疑似体験。2時間目：かかわり合いを意識した議論中心の授業（座学）。3時間目：本物体験。

このように構成することで、学習内容について学ぶ切実感が増し、議論が深まると考えた。また、最後に本物体験を経験させることで、学習内容の定着も図れると考えた。

3. 3 既存の教材を活用する

情報モラル教育に関する教材は、webサイトを中心として数多くある。利用のしやすさと教材の質の高さを一定程度保障できるために既存の教材を活用することにした。そこで、本実践では「はむはむメール」（図1）を利用した。

（<http://www.teacher.ne.jp/school/web/web010/mailframe.html>）

4. 開発された情報モラル単元

第一次 正しいメールの書き方

ねらい：正しいメールの書き方を知る。

主な学習活動：

- ・メール送受信の疑似体験を行う。
- ・いろいろな「はむはむ」からの返信メールの内容を読み比べ、感じたことを出し合う。

第二次 チェーンメールへの対応

ねらい：チェーンメールを自分で止める判断力と態度を養う。

主な学習活動：

- ・チェーンメールを読み、自分の考えを記述する。
- ・チェーンメールに対して自分ならどう行動するのか発表し、話し合う。

第三次 電子メールでのやりとり

ねらい：メールソフトを使って実際にメールのやりを行い、便利さや楽しさ、怖さを実感する。

主な学習活動：

- ・イントラネットで利用できるメールを活用して、友だちとメールを送り合う。



図1 はむはむメールのインターフェイス

・授業の感想から今後の電子メールの利用可能性についてまとめる。

5. 授業の実際と考察

5. 1 第1時 正しいメールの書き方

はむはむメールとは、8匹のハムスターたちにメールを送ると即座に返事が来るというサイトである。しかし、その返信メールの内容は多岐にわたり、良い内容から、個人情報聞きだそうとするもの、言葉づかいが悪いもの、ウィルス忍ばせた添付ファイルを送ってくるもの、そして次時につながるチェーンメールを送信してくるものまで8匹8様である。

言葉づかいの悪いメールから、正しいメールの書き方だけではなく、自らの生活（言葉づかいなど）をふり返ることができた児童の姿が見られた。また、児童からチェーンメールへの対応が問題として出され、次時への課題を明確にしたうえで学習を終えた。

5. 2 第2時 チェーンメールへの対応

学習課題<こんなメールがきたらどうする？>を設定し、チェーンメールについての是非を議論していった。その際に、不幸の手紙のような「悪意のチェーンメール」と献血の呼びかけのような「善意のチェーンメール」を扱い、「回す・回さない」と2者択一の問いで答えさせた（写真1）。そうすることで、意見が分かれ、議論が継続して続いた。また、友だちの意見を聞き、納得したうえで自らの意見を変更する児童の姿も見られた。

児童の感想からも「最初は回しても良いと思っていたけど、チェーンメールを回したら、悪い人によって変えられるかもしれないから、回してはいけないことがわかりました。（Kさん：男子）」のように、友だちとかかわる中で考えが深まったことが伺えた。



写真1 発表前に自分の意見を記述する

5. 3 第3時 電子メールでのやりとり

メールの楽しさを体験するために、イントラネットの校内メールを活用して、子どもたち同士で、本物のやりとりをさせることにした。15分ほど、楽しくメールでのやりとりを行い、次にメールを使ういろいろなシチュエーションを想像させた後、電子メールについての感想を発表させた。

「引越越した友だちにも気軽に送れる」「時間を気にせず送れるのは都合が良い」などの感想から、メールは怖いものだけでなく、楽しく便利に使えるものだということを体験的に学ぶことができたと考えられる。また、メールの先には、相手がいるといった相手意識について学習したという記述も見られた。

6. 本研究のまとめ

単元終了後に児童を対象に行ったミニテストの結果（一例）、「チェーンメールを回さない」という項目に対して、正しく回答した児童の割合は、学習済みクラスで98%であった。一方、未学習クラスでは、14%であった。なお、未学習クラスの最多の回答は「分からない」であった。

さらに、善意から出された類のチェーンメールを見せ、どう対応するかを尋ねた結果、学習済みのクラスでは85%の児童が「無視する」と解答した。以上から、情報モラル（本単元では電子メール）に関する知識・理解の向上が本実践を通して図られたと考えられる。

また、単元終了後のふり返り（自己評価、自由記述）から、この授業を通して、児童の授業に対する満足度が高いことが示唆された。また、自由記述では、チェーンメールへの対応方法の理解とメールの先には相手がいること（相手意識）を理解できたとする記述が見られた。児童は、題材のもつ興味・関心以上に積極的に発言し、他者へかかわりながら学習をすすめることができた。

7. 今後の研究課題

情報モラル指導は、さまざまな分野があり、継続的な指導が必要である。また、今後は児童の発達段階を考慮し、学年を見通した情報モラル単元の設定とカリキュラムの構築を試みたい。

補 足

1. 本単元のカリキュラム上の位置づけは、総合的な学習の時間（情報領域）1時間、学活1時間、道徳1時間である。
2. 本単元「②メールの使い方：チェーンメールへの対応」以外にも、「①正しい情報の見つけ方：検索方法を見直そう」（総合的な学習の時間2時間、学活1時間）「③ケータイの正しい使い方：デジタル万引きってなんだろう？」（総合的な学習の時間（情報領域）2時間、学活1時間）、の単元を実施した。
3. 上記の単元は、①6月、②11月、③2月にいずれも3時間構成で実施した。